

心理学的知覚論の構図

柿 崎 祐 一

序

ひとまず常識的な理解に従って、現前のものごとを見たり聞いたりすることを知覚とよんでおく。心理学の中で「知覚心理学」といわれる部門も、一応このような常識的な定義から出発して、なぜそのように見えたり聞こえたり感じられたりするのかを、できるだけ「客観的」に「科学的」に解明しようとしてきた。しかし、それに伴って、知覚という概念の定義も、知覚を扱う理論的・方法論的な立場と関連しながら、いろいろと変遷を重ね、前記のような常識的な意味での知覚の事実から何をどのように心理学の問題として抽出するか、また、それにアプローチするためにどのような方法をとるかは、極めて多岐にわたってきたのである。

従って、今日ひと口に知覚心理学とよばれる研究領域を全体としてどのようなものとして理解するか、そして個々の特殊研究をその中にどのように位置づけるか、それは必ずしも容易なことではなくなっている。

ここで、「知覚心理学」というよび名について一言しておきたい。これはあたかも教育心理学、臨床心理学、産業心理学などと並ぶ特殊な心理学であるかのような誤解を生じやすい名である。いわゆる知覚心理学はむしろ一般実験心理学の体系の中での「知覚論」とよぶ方がよいと考える。同様に、学習論、発達論などの方が「～心理学」よりもふさわしいであろう。さしあたってはどうでもよいことであるが、以下の論考では、常識的な意味での知覚の事実に基づ盤をおく心理学的研究の領域を知覚論とよぶことにする。

本稿の主題は、従って、今日までの多岐にわたる知覚心理学的諸問題を心理学的知覚論としてどのように統合し体系化すればよいのか、そのための一

つの枠組みを考えてみようとするにある。いいかえれば、今日までの伝統的な知覚研究の成果をどのようにまとめ、どのような相互連関の下に理解すればよいのかについて、一つの認知地図を考えてみることである。未だ大ざっぱで不合理な点も少くないとは思いますが、今日以後の知覚論の発展のための一里塚ともなれば幸である。

I. 知覚論の基本的構成

今日、われわれの手もとには“*The Psychology of Perception*”あるいはそれに類する標題の書物が少なからず見出される。これらはいずれも一読に値する貴重な文献であり、知覚の研究がどこまで特殊的に分化し、どこまで進展してきたかを一通り知るために役立つ。また、それぞれの著者がそれなりにこれらの特殊研究を体系的に叙述しようとしていることも事実である。

しかし、これらのいわゆる知覚心理学が心理学における知覚論としてどのような地位を占めているのか、個々の特殊研究が心理学的にどのような意義をもっているのか、そういう点についてはどれを読んでも必ずしも明らかではない。それはあながちわれわれが読み足りない不勉強のせいだけであるとも思われない。

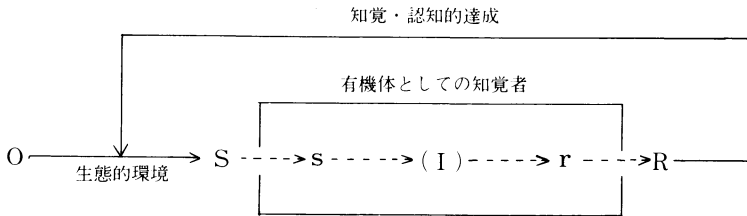
ここで、既成のテキストのそれぞれについて、その内容・構成を具体的に吟味し批判することが必要であろう。しかし、批判のためにはまずわれわれ自身の考察の基準ないし枠組みがある程度まで固まっていなくてはならない。そういう意味で、ここではわれわれ自身の枠組みの構築を試みようとするのである。

I-1. 仮りの図式

心理学における知覚論をいうならば、まず後者を位置づけるべき前者の性格が明示されべきであるかもしれない。しかし、ここで心理学とはなにかなどと論じることは、恐らく無駄なことであろう。なぜなら、心理学と知覚論

とは、まず前者が決まってその中に後者が位置づけられるというような関係にはないからである。知覚論の意義を明らかにすることが自ずからそれを一つの契機とする心理学のあり方をも規定するはずである。

知覚、あるいはより一般的に認知の機能ないし過程について、これを包括的に理解するための図式やモデルが、諸家によっていろいろな形で提示されている。別稿*で述べたように、われわれはこれらを通じて最大公約数的に単純化したものとして、図1のような円環的關係をまず考えておきたい。これは特定の理論的モデルではなく、考察を進めるための仮りの図式にすぎない。



- O：現前の事物・事象（遠刺激）
 S：受容器に与えられる情報(近刺激)
 R：知覚的ないし認知的反応
 s：Sによって生じる効果
 r：効果器の反応
 I：媒介的機構ないし過程

図1 知覚的循環の基本図式

ここで、Oは現前の事物・事象をさすが、その中には他者も含まれる。さらに知覚者の自体並びに自体内の状態をも含む。従って、図の黒枠は必ずし

* 柿崎 視覚の生態。哲学研究, (近刊), 46, 11 (No.541)。

も有機体としての知覚者あるいは人の皮膚の表面を意味するとは限らない。要するに、受容器ないし感覚器の反応としての s を効果器の反応 r にまで媒介する過程ないし機構（これを I で示す）の全体を表わしている。内容は異なるが便宜上ナイサー*の用語を借りて、図1を知覚的循環の図式とよんでおこう。

R は r の結果として表出される反応ないし行動であるが、これも必ずしも現実の運動や動作として現われるものに限らず、例えばじっとしていることもそれ自身一つの R である。 O と S との関係は知覚者の生態的環境を意味する。この点についても詳しくは別稿（前出）を参照されたい。 R は原則としてこの $O \rightarrow S$ 関係に働きかけ、これを変容することによって知覚・認知の機能を達成する。 O をつかんで食べる、 O から逃れる、もっとよく見ようとじっと見つめる、眼をそむける、などのさまざまなしかたで、人は自己の生態的環境に働きかけている。このような働きかけ（認知的達成）としての R が機能的に妥当な場合（食物をみてそれを食べる）もあれば、妥当でない場合（食物とみたが実はろう細工である）もあることはいうまでもない。^{（注1）}

ところで、ここに示されているのは、あくまで物理的世界における物理的事象の関係及びそれに基いて理論的に構成される媒介変数であって、内観的・現象的事実、例えば「みえ（percept）」としての知覚経験の事実そのものは、どこにも含まれてはいない。物理的世界（コフカのいわゆる地理的環境）の中での物理・化学的有機体としての人の活動を図式化しただけであって、それ自体としては「意味」的な内容はもたない。後に述べるように（Ⅳ）、知覚の機構の説明はあくまでこのような「物理的」で「客観的」な事象のレベルでなされなくてはならないのである。^{（注2）}

しかし、これも別稿（前出）で述べたように、図のような物理的・客観的事象の連関は、この「私」自身の意味的世界の事象の連関から遊離して恣意的に構成されるべきものではない。経験としての知覚的世界は、図のような

* 古崎敬・村瀬曼訳 U. ナイサー 認知の構図。1978、サイエンス社。

機構ないし過程の「私」における表現であり、機構や過程は「私」の知覚的世界の対件としてそれを支えるものでなければならない。そういう意味で、知覚は図示の関係全体の表現であって、例えば図中のⅠの一つの位相あるいは部分のような形でその中にはめこまれるようなものではないのである。

1-2. 知覚論の三つの位相

以上のように考えると、知覚論はまずわれわれの日常的な直接経験の事実を正しく記述することから始めなくてはならない。「正しく」ということの意味についてはともかく（後述）、世界はわれわれにどのようにみえているのか、われわれは世界をどのようにみているのか、それをまず記述せねばならないのである。このような記述をかりに知覚の**現象論**とよんでおこう。いわば「主観的」ともいえる直接経験の事実がどのようにして操作的に定義されうるかという方法論的な問題は別として、知覚論は現象論をぬきにすることはできないであろう。^(注3)

「どのようにみえているのか」が記述されれば、次の問いは「なぜそのようにみえるのか」ということであり、これがしばしば「知覚心理学」の最初の設問とされてきた。しかし、これに対する答はむしろ簡単である。つまり、「みえる」のは要するに人が「みる」からである。従って、次の問題は「私」ではなく有機体としての「人」が「みる」とはどういう働きなのかということである。これをここでは知覚の**機能論**の問題とよんでおく。それは、基本的に図1の知覚的循環を対件としながら、知覚的・認知的達成の過程の諸側面を記述することである。

さてそれでは、このような知覚の機能は有機体としての人のどのような仕組みによって支えられているのか。これは、図1のⅠの具体的な構造を明らかにすることによって答えられる問題であり、かりに知覚の**機構論**とよんでおこう。近年の理論的・実験的研究はほとんどここに集中しているといえる。しかし、これらの新しい研究の意義を理解するためには、それに先立って伝統的な現象論及び機能論を述べなくてはならないのである。

このように三つの位相を考えておいた上で、以下われわれの知覚論の概観を試みよう。これはあくまで一つのデッサンにすぎず、具体的な色づけ・肉づけは後日のことに属する。

なお、ここでは視知覚が中心的に扱われる。それは、一つには伝統的に視知覚についての実験的研究が最も多く行われ事実的資料が多いことにもよるが、他方では、視知覚は決して視覚のみに依存するものではなく、むしろ全身の・全人格的な機能と構造の反映であり、そこに知覚の本質が露呈されると考えられるからである。

注1) 心理学ないし知覚論の中に、図のように $O \rightarrow S$ 関係や R とそれとの関係を含めるべきか否かは論点の一つになるであろう。しかし、少なくとも知覚あるいは認知の機能について何らかの意味で“reality”の達成を問題にせねばならないとすれば、このような関係をぬきにすることはできないと考える。また、別稿では R が O に還帰するように図示したが、むしろ R は $O \rightarrow S$ 関係への働きかけとした方がよいと考え、図のように改めた。詳論は他の機会にゆずるが、これらの点については、京都大学知覚研究会での秋田宗平氏（京都工芸繊維大学教授）その他の人びとの批判に負うところが多い。

注2) ここで「物理的」とか「客観的」とかいうのは何を意味するかが当然問題になる。さしあたりここでは、当世の多くの実験心理学者が信奉するのと同じ常識的な意味での物理的であり客観的であると解されてよい。

注3) 直接経験の世界は「みえる」より前に「ある」世界である。「みえる」というのは既に「ある」からの抽象を意味する。「ある」のは「みえる」ことであるとするところに知覚論が始まる。しかも、「ある」ことは根源的に「する」ことに関わっている。そこからまた、「みえる」は「みる」に関わることになる。

Ⅱ．知覚の現象論

Ⅱ－１．記述の関係系

前述のように、われわれの課題は「世界（自己をも含む）はどのようにみえているのか」を正しく記述することから始まる。ここで「正しく」ということの意味は決して単純ではない。実験心理学の歴史は「正しい記述とはなにか」についての考え方の変遷の歴史であったとさえいえよう。原則としては、万人がなっとくし得るという意味で公共性・普遍性をもつこと、所与の全体を体系的・斉合的に理解し得ること、新しい事実を発見し検証可能な仮説を導出し得ることなどが、正しい記述の要件であろう。

今日まで試みられた心理学的記述の方式のうちで、どれが真に正しいものであるかを断定することは必ずしも容易ではない。いずれにせよ、記述はなんらかの言語体系ないし関係系に即してなされる。問題は、いかなる系に refer して記述するかにある。以下、そのいくつかの典型について簡単に述べよう。

1) **内省的記述**—属性ないし次元の抽出— 古典的な意味でいわゆる実験の内省によるにせよ、あるいはより近代的な尺度構成法などによる間接的構成によるにせよ、基本的には被験者（この場合はむしろ観察者）の自己観察（例えば「感覚の大きさ」や「印象の類似性」についての意識的内容の判断）^{注1)}についての言語報告に基いて知覚的世界が記述される。ここで得られる主要な知見は、知覚あるいは感覚の属性ないし次元の特性と諸次元の相互関係についてである。次元の特性の記述は後述の精神物理的記述と重なるのであるが、内省的・分析的である点に困難があるとはいえ、理論的にも実用的にも大きな寄与をしてきたことは事実である。

属性や次元についてのみならず、より一般的に知覚あるいは感覚の内容について内省的に記述することの意義は決して否定し去るべきではない。

2) **実験現象学的記述**^{注2)} 内省心理学から実験現象学へ、そしてさらにゲシュタルト心理学への展開について心理学史のテキストに多く述べられていることをここで繰り返す要はあるまい*。要するに、内省的分析に基いて抽象された

* 柿崎（講座心理学1，1971；2章4；同4，1970，7章，東大出版会）

感覚的要素あるいは属性のタームによって記述するのではなく、現実の知覚的世界の諸相をありのままの姿において捉え、さらにそれらの相互連関を条件分析的に明らかにすることによって知覚的世界を記述しようとするところである。例えば色の現われ方と視野の分節性との関係、運動視に関するホルテの法則における「現象的」距離要因の効果、ゲシュタルト法則、例えば「近さ」の法則における近さとは実は「現象的近さ」であること、さらには「みえの大きさ」と「みえの距離」との関係に不変項があること、その他さまざまな形で現象的・知覚的世界の体制や構造が論じられる。

このように、内省的分析による抽象的要素ないし属性の結合ではなく、現象的世界の諸契機の相互作用的体制を問題とするとき、そこからむしろ必然的に現象的「場」の概念が導かれ、力学的なタームによる記述が要請される。これは、単なる内省的記述や実験現象学的記述が主として日常的言語体系による記述であるのに対して、それとはレベルの異なるより一般的な言語体系による記述に一步を進めたものとして、重要な意義をもつであろう。^{注3)}それはまた、単なる記述ではなく、現象的事実の説明概念としての性格をも帯びてくる(後述、IV)。

もう一つの重要な点は、内省的分析が意味的な内容を捨象することによって純粋な要素を抽出しようとするところである。ティチナーの昔は問わず、現代の知覚心理学者もときにはそれに類似の見解を示す。つまり、意味はむしろ「認知」のレベルの問題であって、学習に依存するなんらかの判断あるいは同定の過程を含むものであり、知覚は意味的なものを含め純粋な形象であるとする。

しかし、実験現象学的記述の立場では、知覚と認知とはこのように区別されるべきではない、全く意味をもたない単なる形象は、幾何学的にはあり得ても、現実にはあり得ない。「人がみる」ことである限り、知覚は常になんらかの意味をもっている。現象的・知覚的世界は基本的に有意義な「事象」の世界である。われわれはいつも、風が吹き水が流れ花が咲き、そして人が泣いている世界をみているのであって、単なる形や色や運動のみをみているの

ではない。このような事象の世界をいかにして正しく記述するかが今後の知覚現象論における重要な課題の一つになるであろう。

3) 精神物理的記述 精神物理的記述とは、物理的言語体系を関係系として現象的事実を記述することである。ここで物理的というのは、物理学的と同義ではなく、いわゆる物理的尺度の所定の操作に基いて構成される体系に refer するということである。われわれは物理系に refer することのみが「科学的」心理学の唯一の方法であるとは必ずしも考えない。しかし、少くとも今日までの実験心理学がそうすることによって大きな成果をあげ、実用的にも少なからぬ寄与をしてきたことが認められる限り、精神物理的記述を主要な方法として採らざるを得ない。伝統的な「知覚心理学」の多くは、ふつう精神物理的測定法とよばれる精神物理的記述に基いて、そこからさまざまな知覚心理学的ストーリーを構築してきたのである。

精神物理的記述については二つの側面を考えねばならない。第一は精神物理的測定としての、第二は本来のフェヒネ尔的な意味での精神物理学としてのそれである。かつて大山*が定式化を試みた際の表現を借りれば、基本的な刺激-反応 (S-R) 関係の測定は精神物理的測定法によってなされるが、それは単に測定手続のことであって、フェヒネ尔的な意味での、つまり物理的「刺激」と精神的「感覚」との関係という意味での精神物理学と直接の関係はない。前記の実験現象学的記述も結局は S-R 関係から導出される反応-反応 (R-R) 関係としての記述であり、常に刺激すなわち物理系に refer してなされなくてはならないとされる。フェヒネル自身の方法が既にそうであったように、直接に測定されるのは「感覚」ではなく弁別力である。

しかし、弁別力の測定法としての精神物理的測定法は、必ずしもここでいう知覚現象論の構成のためだけではなく、実験的研究のすべてにわたって基礎となる測定法の一つである。後述の機能論や機構論の資料も多くは精神物理的測定によって求められたデータからなっている。その意味では一般的な

* 大山正 刺激-反応関係からみた知覚測定。心理学評論, 1960, 4, No.2。

測定法として問題になることであって、現象の記述のみに関わることはない。

精神物理的記述として問題になるのは、前記の第二すなわちフェヒネル的な意味での精神物理学についてである。「精神」と「物理」あるいは「精神」と「身体」との間の関係の法則としての有名なフェヒネルの法則の導出の背後には、かれのある種の一元論的世界観があつたといわれるが、素朴な二元論に陥ることを避けようとする現代の心理学者も、この法則は刺激と「感覚」ではなく刺激と「反応」との関係に関するものとする。ここで反応とは、生理的な指標にせよ行動的な指標にせよ、要するに客観的・物理的な操作によって定義される反応である。感覚もそのような反応である。

実用的なレベルでは、あるいは、研究者どうしの日常語による相互了解のレベルでは、上記のことを十分に承知の上で、刺激と(意識的経験としての)感覚、一般的には「物理的世界」と「知覚的世界」との間の関係としての精神物理的関係が語られる。フェヒネルからサーストンにつながる間接的構成法によるにせよ、スティーヴンス流の直接的構成法によるにせよ、「感覚の尺度化」などが話題になるのはこの意味においてである。しかし、それはあくまで実用的日常語でのことであって、科学的言語でのことではない。

われわれはこのような日常的了解のレベルにおいてではなく、もっと科学的な意味において、ここではあえて二元論的な立場をとりたいと考える。日常的な「私」の経験としての色や甘さや音や重さ、さらにもっと意味的なさまざまな事象が、いわば相互主観的に了解されていることを卒直に認めることなしには、知覚論は意味を失う。現象論の意義に否定的な態度を示すS-R論的知覚心理学者も、結局は現象的なタームによってデータの意味を記述せざるを得ないのである。

かくてわれわれは、「物理的」世界と「現象的」ないし「知覚的」世界という二つの概念を区別し両立せしめねばならない。現象的世界の精神物理的記述とは、現象的世界における事象の関係と物理的世界における事象の関係との関係、つまり二つの関係の関係を共通の言語体系(特に数理的言語)によ

って記述することではならない。

簡単な例として、いわゆるミュラー・リヤーの錯視（図2）について考えてみよう。二つの基線の物理的な長さを a , b とする。「どちらが長く見えるか」が問われている課題状況での、観察者にとつての「みえの長さ」をそれぞれ α , β とする。この場合、観察者が α と β の等関係を含む大・小関係ないし順序

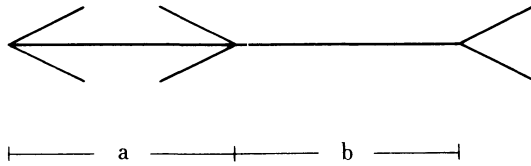


図2 ミュラー・リヤーの錯視

関係を決定することができるという意味で、みえの長さの次元が存在すると仮定する。そうすれば、一般に物理的に $a = b$ であるとき現象的には $\alpha < \beta$ となり、逆に $\alpha = \beta$ のとき $a > b$ となる。つまり、物理的な a と b の関係と現象的な α と β の関係とはこのような関係になっているというのが、この錯視現象の精神物理的な記述である。

ついでに付言しておきたいことがある。しばしば、例えば $\alpha = \beta$ となるとき a と b の値を求め、（図2の場合には） $a - b = i > 0$ の値 i を以て「錯視量」と定義し、「錯視量は i ミリメートルである」と記述することがある。この種の記述の意味は心理学者どうしの間では十分に了解される。しかし、初学者や一般の人びとには大きな誤解を生じかねない。つまり、上の記述が「 $a = b$ のとき、 β が α より i ミリメートルだけ長く見える」かのように解釈されるおそれがあるからである。

前記のように、この場合に精神物理的に記述されるべきことは、要するに物理的な a と b の大小関係ないし順序関係の変化のしかたと、現象的な α と β の大小ないし順序関係の変化のしかたとの関係についてである。いわゆる「感覚尺度」として述べられる精神物理的対数法則やベキ法則はまさにこのような関係の関係を表わしているのであり、同様の関係は、例えば物理的空間

における位置や方向の関係と視空間におけるそれらの関係との関係、物理的速さの関数とみえの速さのそれとの関係、その他、いわゆる知覚心理学のストーリーの全般にわたって見出されるはずである。もっとも、関係それ自身の記述のしかた、どのような関係を関係として捉えるか、それは必ずしも一定しているわけではない。

以上、われわれは知覚の現象論における記述のあり方の主要な方向について述べた。実際にはこれらが互いに重なり合い滲透し合っていることはいうまでもない。さらに、数理的モデルによる記述をも挙げねばならないかもしれないが、これはあらゆる記述に通じる基本的言語体系の一つであると考えられるので、記述のしかたの一つのクラスとして独立的にはあげない。また、いわゆる生理的タームによる記述は、「生理」が「物理」に還元される限り、ここでは精神物理的記述の中に含める。

Ⅱ－２．現象論の内容

「心理学概論」のテキストの中の「知覚」の章で扱われてきたような諸トピックの多くが、知覚現象論に属するといつてよい。つまり、世界はわれわれにどのようにみえているのか、そういう意味での現象的・知覚的世界の基本的な諸様相が、前節で述べたような多少とも異なる体系に準拠しながら記述されてきたのである。それは世界の知覚的体制の記述であるともいえよう。以下、このような体制について、基本的な事項だけを列挙しておこう。

1) **図・地体制** 知覚的世界は原則として図と地の二層として体制化あるいは構造化されている。

2) **外在性と自己中心性** 知覚的世界は、知覚的身体内の事象をも含めて、自己の「外」に自己に対峙するものとして、外在化され対象化されている。「自己」はそれ自身このような世界の特殊な部分であり、世界の体制（例えば前・後とか上・下などの特性）の原点になっている。その意味で知覚的世界は自己中心的である。^(注5)

3) **「かたち」の体制** 知覚的世界の分節的構造、知覚的単位の形成など、

いわゆるゲシュタルト心理学が中心的に扱った諸問題。「かたち」と「形」との区別について後述する（Ⅲ－３）

４）色その他の諸次元の体制 色の現われ方，対比・同化などの諸現象，表色系その他による知覚的諸次元の特性の記述。

５）「空間」的体制 いわゆる奥行き知覚とその成立条件，視空間の精神物理的あるいは幾何学的特性，異方性，空間枠組みの問題など，伝統的な多くのトピックスのほか，広義の精神物理的記述としてのギブソンの生態光学などがここに含まれる。

６）「時間」的体制 運動や変化の知覚，持続や時程などいわゆる時間知覚上の諸問題，動きと速さの知覚，その他，時・空的体制に関わる諸問題。

７）いわゆる「恒常性」 知覚的世界の重要な特性の一つとして，知覚的世界の諸相が近刺激の特性と一義的には対応せず，むしろ遠刺激の特性に回帰するという意味での恒常性ないし恒常現象があげられる。しかしここでは，これを上のように機能論的な言葉で述べるのではなく，むしろ知覚的世界の精神物理的特性として条件分析的に記述されるべきである。

８）事象と意味の世界 前にも述べたように，現実の知覚的世界は事象の世界であり意味の世界である。事物や他の人びとのさまざまな働き(action), それらの相互の働きあい(inter-action)などを「私」たちは直接的に知覚している。その他，一般に対人知覚とか社会的知覚などとよばれる諸事実も，総じて事象(events)の知覚であるといってよい。知覚的世界はさらに，記号，象徴，音声，言語などを重要な成分として含んでいる。これらを，あるいはこれらとの関係を見捨てては，知覚的世界の完全な記述はできないであろう。どのようにすれば，これらの事実を「正しく」記述することができるのか，これも今後に残された課題の一つであろう。

注１）観察者としての内省的言語報告ではなく，刺激に対する被験者の言語反応を問題にすべきであると主張するのは，現象論ではなく後述（Ⅳ）の機構論の立場でのことである。例えば拙著（知覚判断，1974，培風館）5章参照。

- 注2) ここで現象学的というのは必ずしもいわゆる現象学との直接の関係を強調することではない。具体的にはルビンやカツからゲシュタルト学派へ、そしてさらにはギブソンなどにもつながる条件発生的・条件分析的な方法による記述のことである。
- 注3) ここで「場」とは、必ずしもケーラー流の *isomorphism* に基く「心理・物理的」場ではなく、むしろレヴィンの意味でのいわば純心理学的構成としての場の概念を意味する。
- 注4) なんらかの数理的モデルないし公理系に *refer* して（例えば因子分析法や多次元尺度法によって）現象を記述する場合、記述のタームとしては刺激の *specification* は必ずしも含まれない（例えばいわゆる色立体）。記述としてはむしろ実験現象学的な記述のうちに含まれよう。しかし、その場合にも直接のデータはなんらかの S-R 関係であり、その意味では実験現象学的記述の中に精神物理的記述が含まれている。なお、ここで「刺激」とは何か、例えばさきの図1での O（遠刺激）をさすのか S（近刺激）をさすのかがクリティカルな問題となるであろう。しかし、さしあたり原則として S をさすものとしておく。
- 注5) このような意味でのいわば「現象的」な自己ではなく、世界をみる者としての「私」はどこにあるのかと問われるかもしれない。しかし、「私」は本来どこそこにあるというようなものではなく、この知覚的世界・行動的世界がすなわち「私」の世界である。

Ⅲ．知覚の機能論

「世界はどのようにみえているのか」との問いに次いで問われるのは「なぜそのようにみえるのか」ということであり、それへの答は要するに有機体としての人がみるからであるとすれば、それでは「みる」とはどのような働きなのかというのが、現象論から機能論への発展として前に述べたところである。

「みる働き」としての知覚の機能をどのようなものとして捉え、どのように記述すべきかについては、種々の立場があり得るであろう。例えば、これを「私がみる」こととして捉えようとする立場が考えられる。そこでは「みる」とは「私」の世界の自己分節・自己体制化の過程である。ゲシュタルト理論の基盤もそこにあったのではないか。しかし、それでは結局は現象論の枠を超えられないのではなからうか。

ここでは、さきに示した円環的連関の図式(図1)を考察の枠組みとして、それとの関係において記述するのが妥当であると考え。それは、「私」ではなく有機体としての「人」の機能として「みる働き」を問題にすることである。

また、機能の問題は一方では前章の現象論の各段階と対応させて考えねばならず、他方では次章の機構論とも密接に対応していなくてはならない。そういう形で、「みえる」―「みる」―「みる仕組み」の相互関係が明らかにされねばならない。むしろ、実際は機能論と機構論とはかなりの程度に重複し輻輳するのであって、両者を区別し難い場合も少くない。

このような事情を一応了解した上で、ここでは知覚の機能を選択、統合、消化、課題解決という四つの側面にわけてみることにする。これらは互いに独立的な機能ではなく、例えば選択は同時に統合であり、それはまた対象を指示し代表し意味づける消化の機能でもあるというふうに、有機的に関わりあっている。

III-1. 選択の機能

知覚は無選択的な受容ではなく、まずもって選択的な機能である。^{注1)}いくつかのテキスト*にも述べられているように、このことは種々のレベルでさまざまな形で認められる事実である。

*例えば柿崎・牧野達郎編 知覚・認知, 1976, 有斐閣。(なお、本書の編集の多くは牧野氏の努力に負うものである。)

1) **基本的弁別機能** いわゆる絶対閾や弁別閾などの事実によって示されるように、それぞれの受容器はその適刺激に対して選択的に特に敏感に反応し、さらに適刺激の範囲内についても選択的に反応する。これらの機能はそれぞれ特定の機構（次章）によって支えられているのであり、それが人の弁別機能の基礎であることはいうまでもない。

2) **対象化の機能** 現象的には「図」の成立に対応する。所与の多様の中から特定の一つないし一群の事象をその際の対象（もの）としてみる機能である。自己もそのような「もの」の一つになり得る。

3) **注意の機能**（あるいは「合焦点」機能） 対象化の機能について特にその active な面を強調すれば、それはいわゆる注意の機能を意味する。眼球運動その他の定位機能、さらに一般的な探索的機能を媒介にして、特定の「もの」に知覚の焦点を合わせる機能である。これは、その際の人の側の認知的枠組みや構えなどにも依存するという意味で、後述の消化の機能とも密接に関係している。

4) **同一視機能** これも前記の3)と直接に関係するが、所与の状況の変化を通じて一つのものをまさに一つの「もの」として捉える働き、いいかえれば、絶えず変形し変容する情報の流れの中からなんらかの不変項(invariance)を抽出し、さらにそれを保持ないし保存する働きである。これが、前章であげた恒常性の現象、特に「ものの恒常」の事実に関係することであるのはいうまでもあるまい。また、この不変項の選択・抽出ということは、これも前記のギブソンの生態光学論の問題をも含めて、知覚の全般に関わる基本的な機能の一つである。

5) **枠組み（基準系）の選択** 枠組みという概念はかなり包括的で多義的であり、それぞれの場合について定義を明確にせねばならない。枠組みというよりはむしろ関係系とか基準系とか、あるいはまた構えとか態度などの概念を用いる方が適切な場合もある。しかし、ここではさしあたり多義的なままで、これらのすべてを包括して枠組みとしておく。

知覚はなんらかの枠組みを通して、あるいはなんらかの関係系に即して行

われる。このことは低次の感覚的レベルから高次の認知的レベルに至るまで、知覚のあらゆる階層について認められる事実であって、ここに枚挙する要はないであろう。ところで、同時に二つ以上の枠組みが機能することは原則としてあり得ない。そこから、枠組みの選択ということが問題になってくる。

一口にいえば、いかなる枠組みが選ばれるかは、その際の人（知覚者）がおかれた状況のもつ課題性（の認知）とその知覚者の傾性とに依存する。そして、このことはまた後述の統合や消化などの諸機能とも関連する問題を提起する。

Ⅲ－２．統合の機能

１）**選択的統合** ここで統合ということについて二つの側面を考えておく必要がある。第一に、一般に一つのものが選ばれるのは他のものとの関係においてのことであるから、ある全体の中から特定の部分が選択されるということは、他面からすれば全体がそれなりに体制化され統合されることをも意味する。現象的に一定の図・地分節が成立すること、さらにそこに一つの「かたち」や「もの」がみられること、もっと一般的には、ある全体について可能な選択肢の中から特定の一つの知覚ないし反応がその際の関係系に即して選択的に成立すること、これらはいずれも、選択が同時に全体の体制化・構造化を予想することを示している。例えば、視野のどの部分がどのようにみられるかによって、全体のみえ方が再構造化される事実や、いわゆる知覚判断の過程を考えてみれば、このことが理解されるはずである。

統合の第二の側面は、一つのものが選ばれることによって、そのもの自体がまさに一つのものであるとして統合され内的に体制化されるという側面である。いわゆるゲシュタルト法則による「かたち」の成立として論じられた多くの事実がこれに当たるのであり、ふつう知覚の統合機能というのは主としてこの側面に関してである。しかし、そこには常に上記の第一の側面が関わっていることを見逃してはなるまい。

いずれにせよ、選択と統合とはこのように表裏の関係にある。このことを

かりに選択的統合とよんでおこう。

2) 外的統合と自己基準的統合 統合の機能については、さらに別な軸に沿って二つの側面をわけてみることができる。一つは、知覚的世界の内的必然性（ゲシュタルト心理学の用語をかりればゲシュタルト法則ないしプレグナントの原理）^{注2)}に基く体制化としての空間的・時間的統合である。別な表現をすれば、それは外的な座標系、特に視知覚においては視空間座標系に即して成立する統合といってもよい。そういう意味で、このような統合を外的統合とよんでおく。

もう一つは、いわば身体的座標系による統合であり、身体的・運動（動作）的諸要因ないし諸系との関係における統合である。これを外的統合に対して自己（あるいは自体）基準的統合とよぶことにしよう。

自己基準的統合は知覚論において特に重要な意義をもっている。これがⅡで述べた自己中心性の事実に対応するのはもちろんであるが、より基本的には、みるという働きが身体・運動との関わりなくしては成立し得ないことを意味している。つまり、人は眼だけでみるのではなく体全体でみるのである。このことは、知覚の発生並びに発達過程にも深く関連する重要な問題を含んでいるが、本稿ではこれ以上に立ち入ることはできない。

さらに、いわば第三の側面として、感覚的諸系の統合的機能（いわゆる異種感覚系の相互作用）があげられなくてはならない。これは上の二側面の中間的な性格をもつといってもよいが、これもまた知覚的統合が全身的・全人格的な機能であることを意味している。

Ⅲ－3．消化の機能—知覚と枠組み—

知覚の機能は選択的統合として終るのではなく、これはさらにより高次の機能の中に包摂される。選択的統合によって成立するのは単なる「かたち」^{注3)}の体制であって、それはさらに知覚者の側の内的な構造の中にいわば「自分のもの」として摂取され「消化」*されなくてはならない。

* 矢田部達郎 心理学序説、1950、創元社、P.208。知性の法則（デッサン）、哲学研究、1946、30、(No.351)。

例えば、一つの△は「かたち」としては常に一つの△である。しかし、それは時と場合によって「さんかく形」でもあれば「デルタ」でもあり、また「やま」でもあれば、さらには「なにかへんなもの」ですらある。具体的な知覚は、少なくとも一つの「もの」が知覚されている限り、なんらかの意味的構造を持っているのであって、単なる形象の知覚ではない。*

このような、知覚者によるいわば意味づけの機能を消化の機能とよんでおく。これについてもまた、いくつかの側面が考えられる。

1) 枠組みの動態 前に枠組みの選択に関して述べたように、枠組みというのは多義的な概念であるが、要するに一つの事物がどのように知覚されるかは枠組みに規定される。枠組みは前述の外的統合並びに自己基準的統合のあり方、さらに両者の相互作用のあり方をも規定するものとして、その際状況の中に含まれながら機能している。

このような事情を示す多くの事實的知見について、ここに詳説する余裕はないが、ただ一つ注意しておくべきことがある。それは、知覚の枠組みを静的・固定的なものと考えてはならないということである。あたかも、食物を摂取することによって、食物が変容するのみでなく身体もまた量的・質的に変容するように、所与を枠組みの中に位置づけ消化することによって、枠組み自身もまた変容するはずである。それは、例えばヘルソンのいわゆる順応水準の変化としての新刺激状況への順応、刺激の文脈の移行による判断尺度の変容などの事実によっても示されるのであるが、いずれにせよ、枠組みはそれ自体として自立するものではなく、所与との動的相互作用においてのみ具現し機能するものと考えるべきであろう** このような意味において、消化の機能とは、所与を枠組みの中に摂取し位置づけることである。そこで、次にはもう少し具体的に枠組みの働き方について考えてみよう。

2) 枠組みとしての構え、要求その他 知覚を規定する重要な要因としての

* 園原太郎（編著） 認知の発達。1980，培風館，序章及び2章。

** 柿崎 知覚判断。1974，培風館，9章。

構え、要求、その他のいわば「内的」あるいは「主体的」な要因の効果が強調されて既に久しい。ここでいう構えの概念もまた多義的であるが*、前に合焦点機能に関して触れたような意味で、まず選択のしかたを規定し、そして結局は消化のしかたをも定めるような、「外」に対する知覚者の態勢を意味する。例えば、△は幾何学の問題を解こうとする構えの下では「さんかく形」とみられ、ギリシア文字を読む構えの下では「デルタ」となる。

また、要求というのは、例えば人が食物を求めているのか異性を求めているのか（いわゆる動因）によって知覚が変容するとか、恐れている人は枯尾花を幽霊とみるなどといわれる場合の有機的諸条件を総稱する。

これらがそれぞれ、知覚の枠組みとして消化に参与する。さらに、前述の自己基準的統合に関連して、運動（動作）的な枠組みもまた消化の機能に関わるものとして重要である。これらをも含めて、ここでも前項で述べたと同様の動的な連関を前提せねばならない。

なお、さきに消化とはいわば意味づけの機能であると述べたが、正しくは意味は決して「つけ」加えられるべきものではなく、消化に即して成立するものというべきであろう。矢田部**が「消化の法則」を「体制の法則」の第二の位相として述べているのもその謂ではなかろうか。

3) 概念的・言語的枠組み 消化の枠組みとして最も重要なものは概念的なそれであろう。ここで概念とは、いわゆる動作的概念をも含む広義の概念をさす。知覚における概念的枠組みの機能については他所でも述べられているので詳細は省くが***知覚が単なる「かたち」の知覚ではなく「形」の知覚であり、さらには次に述べる意味での「行為」であるならば、そこにはなんらかの概念的な媒介がなくてはならない。いいかえれば、知覚は即ち知覚判断であるといってもよいであろう。所与をなになにと（して）みるものが具体的な知覚である。知覚は行為の可能性の表現であり、知覚的世界は「仮説」

* 柿崎 構えについて。京大文学部50周年記念論集，1956。

** 矢田部達郎，(1946; 1951, 前出)

*** 園原 (1980, 前出)

の体系である。当然そこには概念的な範疇化の機能が要請されるであろう。それはさらに象徴的・代表的機能を含む言語的枠組みとして、最も高次の消化機能を成立させる。

Ⅲ－４．課題解決機能としての知覚

有機体としての人がおかれている状況が定常的でない限り、いいかえれば、人の環境世界が変化を含む限り、その状況は人に対してなんらかの課題性をもっている。このことは前述の構えや要求の問題ともつながるのであるが、少なくとも何かを何かとしてみているならば、知覚は知覚する人の課題解決の行為の表現、あるいは行為の可能性の表現である。このことは、いわゆる機能主義的知覚論者が強調した点であった。トランスアクションとしての知覚、仮説－検証過程としての知覚、その他さまざまな言葉で述べられてきたことについては、ここで改めて説く要はあるまい。

われわれが最初に示した図式（図1）も基本的には同様の観点から描かれている。それは、知覚的・認知的反応（R）として事象（O）に働きかけることを介して自己（黒枠で示される）を変容し形成し、そこからさらにOに還帰するという円環的關係を表わしている。ただ、始めに断わったように、これはあくまで物理的世界の事象として示されているのであって、例えばブルンスイクのレンズモデルのように、Oから発した情報が手掛りを介して黒枠の内部に「知覚的達成」として焦点を結ぶというような關係を表わしているのではない。このことは重ねて注記しておきたい。

注1）だからといって、これが直ちにいわゆる知覚の「主体性」とか「目的性」などを意味するのではない。

注2）「知覚的世界の内的必然性」のような言い方をするのは、当面の現象論・機能論の立場での記述としてである。このような統合を成立させる過程や機構は次の機構論が明らかにすべき問題である。

注3）柿崎・牧野（1976，前出）はかつて「かたち」と「形」とをこのような意味

で区別した。単なる形象としての△は「かたち」であり、「さんかく」や「やま」は「形」である。

Ⅳ．知覚の機構論

以上、世界はどのようにみえているのか（現象論）、みるとはどういう働きなのか（機能論）について記述してきた。これが本当に「正しい」記述であるか否かは識者の批判にまっほかはないが、次の重要でかつ困難な問題は、このように記述された事実をどのように説明するかにある。そもそも説明とはなにか。それを論じることはここではできないが、要するにそれは、記述された事実をより公共的に操作可能なタームにおきかえ還元して記述することであると考えられる。

ここでは、前章でみてきた知覚の機能がどのような機構（しくみ）によって支えられているのかを、上述の意味において説明せねばならない。^{注1)}それはつまり、図1の黒枠の中のⅠを明らかにすることである。これは現在までのところ主として二つの方向からアプローチされてきた。一つは神経・生理学的なタームによってⅠの過程を分析しようとするものであり、いま一つはⅠ（あるいはⅠを含む全体）を一つの情報処理系とみなして、処理の機構を明らかにしようとするものである。後者の場合、必ずしも神経・生理学的な構造との対応を求めるのではなく、心理学的構成あるいは媒介変数としてのⅠないしその下位系が定義され、さまざまなモデルが構成されつつある。もっとも、実際はこの二つの方向が交錯することも少くないが、それはやむを得ぬ、

以下、機能論の諸位相とできるだけ対位させながら、要綱のみを列挙しておく。

Ⅳ－1．知覚の器官とその生態

ふつう視覚系とか聴覚系など一般に感覚系とよばれる器官の構造と機能として、大ていのテキストやハンドブックに記載されている事項がここに入る。

しかし、さらに必要なことは、それぞれの器官がどのような生態の中にあるかを明らかにすることである。眼や脳がどのような働きをするかを明らかにするためには、眼や脳がどのような環境ないし生態の中で形成され機能しているのかを知らねばならないのである*。

Ⅳ－２．選択の機構—感覚的情報処理のメカニクス—

１）**刺激の選択** いわゆる適刺激の事実からさらに各受容器ないし細胞の反応の特性などについての分析によって、機能としての刺激選択の過程が説明される。

２）**刺激の検出と弁別** 受容器に与えられるエネルギーの時・空的分布の変化としての刺激の検出に関する諸機構ならびにその反応特性、より一般的には各種の弁別反応の基礎になる機構とその特性のような、どちらかといえば神経・生理学的な機構がここで問題にされる。^(注2)

３）**諸系の相互作用の機構** 単に一つの受容器ないし感覚系の特性のみでなく、他の諸系との情報交換あるいは相互作用が検出や弁別に影響することを示す諸事実、ならびにその機構が明らかにされねばならない。さしあたりここでは、検出や弁別に及ぼす異種感覚系や身体・運動的諸系の影響についての機構が問題である。

さらに、例えばかつて知覚的防衛などとよばれた事実に関して、記憶系や情動系から検出・弁別機構に及ぼされる促進や抑制の効果についての機構も問題にされなくてはならないが、このことは後述の「消化」の機構における意味的なレベルでの相互作用の問題にもつながる。

４）**特徴の抽出** いわゆるパターン認知の問題に限らず、一般に色、形、奥行き(立体視)、運動などの特徴抽出機構について、神経・生理学的な多くの知見とも併せて、情報処理の機構が盛んに研究されつつある。このような抽出の機構は、機能論としての対象化や合焦点機能の問題とも関連して、さら

* 拙稿（視覚の生態，前出）

に後述の統合の機構の中に包摂される。特に視知覚については眼球運動の機構がここに大きな関連をもつ。

5) 不変項の抽出 前に同一視の機能として述べたことに対応して、不変項（あるいは高次の刺激変数）の抽出に関する機構が考えられねばならない。ここでも近年の神経・生理学的知見が多くの示唆を与える。これはまた現象論的には恒常性の事実と大きな関わりをもつ。

6) 情報の保存と検索 選択の機能として述べたことの多くは、記憶の機構あるいは情報の保存と検索の機構を要請する。これについても近年の情報処理モデルに基く諸研究が重要な知見を与える。

IV-3. 統合の機構—知覚的体制化のダイナミクス—

ここでも、機能論として述べたところに対応して、次のような機構が明らかにされなくてはならない。

1) 時間・空間的統合の機構 これは、前にも触れた形、奥行き、運動その他、いわゆる錯視や対比・同化などの諸事実をも含めて、伝統的に知覚の時・空体制化の過程に関することとして述べられてきた多くの問題を説明すべき機構である。これについても、一方では神経・生理学的、他方では情報処理的アプローチがかなり進展しつつある。しかし、少くとも現在の段階では、むしろ力学的なモデルの方が好都合ではなかろうか。統合あるいは体制化を問題にするならば、力学的ないし力動的な原理（例えばかつて「場」の概念で記述されたようなモデル）が必然的に要請されとも考えられる。ミクロな情報交換のメカニクスよりはマクロな相互作用のダイナミクスについてもっと具体的に明らかにする必要がある。

選択の機構もまた力動的体制化過程の半面をなしており、例えば特徴抽出の機構のごときも基本的には体制化過程に包摂されうるのである。

2) 系内及び系間相互作用の機構^(注3) 上記と同様のことは、同一感覚系内及び異種感覚系間の、さらにそれらと他の諸系（記憶系、運動系、情動系など）との間の相互作用についても考えられる。このような相互作用に基く統合が

前章で述べた自己基準的統合の機能を説明することになろう。現象的「自己」に対応する過程もこの文脈の中で捉えられる。

3) **統合の階層的構造** 統合と選択とが同じ体制化過程の両側面であることは前にも述べた。現象的に一つの「かたち」が成立することは、刺激(変化)の検出・弁別や特徴抽出などの機構に依存すると考えられるが、それは同時に一つの「かたち」が単位として分凝し統合されることを意味する。ところで、このような意味での統合は、例えば単なる「かたち」から有意味な「形」へ、さらには一つの「文字」へというように、比較的低次の統合からより高次の統合へと向う階層的な構造(ヒエラルキー)をなしている。そして、そこにはこれまで挙げた選択的統合の諸側面も含まれているはずであるが、さらにそこには次の「消化」の機構が関わってくる。

IV-4. 消化の機構

前章でわれわれは「消化」とはいわば「意味づけ」の機能であるとした。ここではそれに対応すべき機構が問題になる。ところでわれわれは、機構はあくまで機構であって、それ自体としては「意味」を内含しなければ表現もしないものであることを認めておかねばならない。意味は了解されるべきものであって、特定の機構や過程として同定ないし説明されるべきものではないと言うべきかもしれない。

従って、ここで扱われるのは、枠組みへの位置づけ、別な表現をすれば「既存の体制への摂取一場所指示一」*の機能としての消化の機構である。それはまた、特定のクラスの刺激(情報)と特定の反応(のクラスあるいはカテゴリ)との関係を含む全体としての刺激一反応関係の構造化**といってもよかろう。このような意味での消化の機構を明らかにすることは、前述のように多義的な「枠組み」の定義をもっと精練することにもつながるであろう。

* 矢田部(1946, 1950, 前出)

** 柿崎(1974, 前出)

1) **次元の成立** 色をみるのか、形をみるのか、文字としての上手・下手をみるのか、あるいは文章を読みとるのか等々、本来は多義的な刺激状況について、なにがその際の知覚の次元として選択されるのか。このような、前出の用語でいえば枠組みの選択の機構がまず明らかにされなければならない。その際その人が何をどのようにみるのかを決定する機構である。それについての知見は、究極的にはおそらくその際の状況（人—環境の関係の全体）がその人に対しても課題性の構造を分析することによって得られるであろう。

2) **手掛りの分化** 次元の成立ということはまたいわゆる手掛り (cue) の分化をも意味する。例えば、奥行き弁別の手掛りとしての「重なり」の要因」がまさにその際の知覚において手掛りとして効果をもつためには、それがその際その人にとっての課題性との関連において分化していなくてはならないのである。^{*}このことはまた、さきに統合のヒエラルキーとして述べた高次のレベルでの「概念的枠組み」の成立とも関連する。このような過程についての具体的な「説明」はなお将来にまつほかはない。

3) **注意と決定の機構** われわれのいう消化とは、いいかえれば、本来多義的な所与としての一つの△を例えば「やま」とみるような同定の機能である。さらにいいかえれば、所与の特定の次元に注意し（次元を抽出し）、さらに要すればその次元内の特性を弁別し、そこに特定のクラスの反応を関係づける（「小さいやま」、「大きいやま」）ような機能である。そこには、「刺激」の次元の分化のみならず、「反応」の次元についても、次元間及び次元内の弁別ないし分化としての決定（決断）の過程が含まれなくてはならない。^{注4)}このような機能はいわゆる知覚判断に類比できるはずである。そういう意味で、知覚判断の機構についての研究も必要であろう。

4) **消化における諸系の相互作用** 「意味」的体制の成立としての消化の機構は、いいかえれば高次の統合の過程であり、そこには諸系の複雑な相互作用が含まれるはずである。特に、従来たとえば知覚的防衛とか閾下知覚とか

* 園原（1980，前出）

ある種の意味般化などによばれたような、いわば識閥下のレベルでの統合ないし相互作用に関する事実的資料と、それを説明すべきモデルが展開されつつあることは注目すべきであろう。

5) 課題の構造　ところで、これまでの叙述を通じて、その際の状況のもつ課題性ということに再三ふれた。もちろん、ここで課題性とはその人その知覚者にとっての課題性（認知されると否に関わらない）であって、どのような課題が成立するかは状況の特性（そこにはその人の個性ないし傾性も含まれる）に依存する。このことは直ちに次の問題につながる。

Ⅳ－5．学習と発達の機構

Ⅲで述べたような課題解決の機能が学習の機構に依存することはいうまでもない。図1に示した知覚的循環の過程は、人が認知的反応Rの機能的妥当性を高く維持するような自己変容のサイバネティクスを含んでいる。その意味でも、知覚は行為の可能性の表現であるといわれたのである。RがOないし $O \rightarrow S$ 関係に働きかけ、それがさらに人にフィードバックされるところに枠組みの再選択、知覚的統合の再体制化が行われる。これまで述べた選択・統合・消化の機構は、常にこのような意味での学習と発達の過程を要請している。

従って、知覚論はまた学習論と発達論とによって大きく支えられなくてはならないのであり、またそれらを含むものとして知覚論それ自体も再体制化されなくてはならないのである。このような事情についての詳論は他の機会にゆずるほかはない。

注1) ここで「機構」というのは、必ずしも静的・機械的なメカニクスのみではなく、むしろ動的で有機的なダイナミクスをも意味している。従って、機構の代りに過程といってもよいであろう。

注2) 検出や弁別の機構に関係する一つのモデルとして信号検出理論をもあげるべきであろう。しかしここでは、これはむしろ方法に関することとして別に扱

うこととする。

注3) ここで「系」というのも、必ずしも特定の神経・生理学的構造を対件として考えているのではなく、一つのクラスに属するものとして分類するのが妥当であり便利であると考えられるような機能のグループを意味している。

注4) 知覚判断に関する拙著(1974, 前出)では、この点に関する扱いは極めて不十分であった。

まとめと反省

われわれは、いわゆる「知覚心理学」の多くのデータを「心理学における知覚論」として再体制化するための一つの枠組みを設定しようと試みた。知覚論を大きく現象論・機能論・機構論の三つの側面に分け、このような枠組みの中に伝統的な多くの知見と新しい研究を位置づけ「消化」しようとした。

しかし、まだまだ「こなれ」の悪い部分が残されていることは否めない。新しいものを消化するためには枠組みそのものも変容せねばならないことは、われわれ自身が強調した点の一つであり、そういう意味でも本稿は試論でありタタキ台であるにすぎない。

特に気になる点の一つは、われわれのいわゆる現象論の中に、「私」のみる世界の記述と有機体としての「人」のみる世界の記述との区別が必ずしも明確でない面があるのではないかということである。われわれのいう意味での現象論の基盤は「私」のみる世界でなければならず、またそれをぬきにしては知覚論はなり立たないというのが、われわれの主張の一つであった。

しかし、世界を精神物理的に記述しようとするとき、記述は「私」のみる世界の記述ではなく「人」のみる世界のそれにすりかえられてしまうのである。それは、心理学が「私」ではなく「人」の科学である以上はむしろ当然のことであり、心理学的世界と「私」の世界との間にギャップがあるのは、科学としての心理学の宿命であるといえよう。

それにしても、少なくとも現象論を心理学的知覚論の中に位置づけるために

は、知覚現象論に内在するこのギャップを安易に「飛躍」するのでもなく、また確率的に「漸近」するのでもなく、足でわたる橋をかけるための方法論を必要とする。問題は再び現象の「正しい」記述とはなにかということに立ち戻らざるを得ないのである。

われわれの現象論のもつこのあいまいさは機能論の未熟さにもつながる。それなら、むしろ知覚論は機構論だけでよいのではないかとの意見も出よう。その方がよほど科学的にスッキリするかもしれない。しかし、機構論のみが自立するならば、本文中でも述べたように、心理学の意味は心理学者どうしの日常語のレベルで了解されるだけのことになる。

このような問題をも含めて、知覚論のいわば第四の側面として、方法論があげられなければならない。そこでは、いわゆる「知覚測定」の方法もそこに含まれようが、より基本的には上のような意味での記述のしかたが問題になる。それは結局、知覚をどのように定義するかということである。われわれはまず日常経験的な知覚の事実から出発したのであるが、最後にはもう一度改めて知覚とはなにかを問わなくてはならないのである。(1980. 11. 10)